



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 天理人欲説の淵源につきて                                                                        |
| Author(s)    | 松山, 直蔵                                                                              |
| Citation     | 懐徳. 1925, 3, p. 32-38                                                               |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/88713">https://hdl.handle.net/11094/88713</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

の繪畫史上に特筆すべきことである。(畢)

## 天理人欲説の淵源につきて 懷德堂教授 松山直藏

天理人欲の説は、支那儒學の敎説の上に於て、極めて重要な位置を占め、殊に宋儒敎説の中心を成せるものなり。而して其の説の出づるところ樂記に在り。然れども、其の思想の淵源するところは一般に大禹謨の人心惟危道心惟微に在りとせられ、三代以上の思想として、堯舜以來傳授相承するところのものなりと信せらる。尙書古文の僞を疑ふ朱子にして尙且つ然り。況んや其の他の儒者に於てをや。されど、清朝に至るに及び、考證の學漸く盛んにして、經典につきても本文批判の風起り、尙書僞古文の辨明覈となり、大禹謨の如きは僞古文にして、人心惟危の四句は荀子解蔽篇に原きて僞作せるものなること明白となりたれば、今日に於ては、たゞ大禹謨に在りとの故を以て、三代以上の思想なりとは信すること能はざるに至れり。今少しく樂記に見えたる天理人欲の説に就きて考査を試みんと欲す。

### 一、樂記の作者

天理人欲の説は、禮記の樂記篇に見ゆれば、天理人欲説の淵源を考ふるには、先づ樂記の作者に就きて考へざるべからず。然るに樂記の作者につきては、古來異説あり。第一は漢書藝文志の説にして

武帝時。河間獻王與毛生共采周官及諸子言樂事者。以作樂記。

と曰ひ、西漢の河間獻王と毛生との共に作るころにして、其の采るところは、周禮と諸子とに在りたり。

第二は隋書音樂志に載する梁沈約の上奏中にある説にして、

樂記取<sub>レ</sub>公孫尼子<sub>一</sub>。

と曰ひ、其の采るところ、公孫尼子に在りとなす。公孫尼子は或は孔子の門人なりといひ、或は七十子の弟子なりといふ。第三は王應麟の困學紀聞に引ける宋儒致堂名明仲の説にして、

樂記<sub>ハ</sub>子夏<sub>ノ</sub>所<sub>レ</sub>述<sub>ヲ</sub>。又云<sub>フ</sub>。樂記<sub>ハ</sub>子貢<sub>ノ</sub>作<sub>。</sub>

と曰ふもの、第四は宋儒陸象山清儒姚首源名際恒我が伊藤仁齋等の説にして、

樂記之言亦根<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>老氏<sub>一</sub>。(陸象山語錄)

人生而靜四句。此<sub>レ</sub>文子引<sub>ニ</sub>老子<sub>一</sub>語<sub>ヲ</sub>也。(姚際恒禮記通論)

樂記雖<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>天理人欲之言<sub>一</sub>。然<sub>レ</sub>本<sub>ニ</sub>出<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>老子<sub>一</sub>。(伊藤仁齋語孟字義上)

と曰ひ、老子に出づとなすものなり。今此等の四説を検するに、先づ第一説に就きて考ふるに、漢書に據るに、毛萇<sub>ハ</sub>趙人<sub>。</sub>爲<sub>ニ</sub>河間獻王<sub>一</sub>博士<sub>。</sub>とあれば、藝文志に毛生とあるは毛萇のことなるべし。又志に據るに、文帝の時、魏の文侯に事へたる樂人竇公を得て、其の書を獻せしめしに、周官大宗伯の大司樂の章なりきとあり。されど、河間獻王が毛生と共に采りし周官は、果して大司樂の章のみなりしか、はた他の樂事をいへる部分をも含みしか、今は明かならず。諸子とは如何なるものなりしか。藝文志には、樂六家を載するに、樂記二十三篇が首にありて、それより以前の諸子の名見えざれども、今樂記中に其の名を存する子貢子夏竇牟賈の如きは、何れも孔子より樂を傳ふるを見れば、所謂樂事を言ふ諸子の一なるべし。韓非子顯學篇に、孔子の後八儒に分れたることをいひ、其の中の仲良氏を陶潛の群輔錄には、仲良氏傳<sub>ニ</sub>樂<sub>一</sub>爲<sub>ニ</sub>道<sub>一</sub>。以<sub>テ</sub>和<sub>ニ</sub>陰陽<sub>一</sub>。爲<sub>ニ</sub>移<sub>ニ</sub>風<sub>一</sub>易<sub>ニ</sub>俗<sub>一</sub>之儒<sub>。</sub>といへるを見れば、仲良氏の如きも、また樂事を言ふ諸子の一なるべし。又當時の教學界の上より考ふるも、墨子の學派に於ては、非樂の説を唱ふれば、之に對して、儒家に於ては樂を力説し、之を尊重するものゝ輩出せし事は、想察し得らるべし。又樂は情性感動の發洩するものなれば、

従つて樂を論ずるには、勢性情を論ずるに至るべし。王充論衡の本性篇に、世碩を始とし、宓子賤漆雕開公孫尼子能く性情を言ふことを叙せり。此等諸子亦樂事を言ふ諸子ならんか。隋書經籍志に公孫尼子一卷あれば、梁沈約は必ずや之を觀たるなるべし。而して沈約が樂記取公孫尼子と云へるを見れば、樂記の一部分は公孫尼子に出でしものなるべく、従つて樂事を言ふ諸子の一なること明かなり。されば漢志に所謂諸子の樂事を言ふものとは、孔門の諸子並びに其の學を傳ふる徒なるべし。今の樂記は一篇なるも、漢志には二十三篇とあり。又別に王禹の傳ふる二十四篇の樂記あり。何れも河間獻王より傳はりしものなれども、同一ならざりしものゝ如し。別錄に據れば、二十三篇の目全存せり。而して今の樂記は其の中の十一篇を合せたるものなるに似たり。自餘の十二篇今傳はらず。今の樂記には周官の大司樂章を始として、他の樂事を言へるもの采り入れられたるところなきを見れば、それらは他の十二篇中に采り入れ居られしものならんか。

第二說に従へば、樂記は孔門諸子並びに其の學を傳ふるものゝ樂を論せしものを、河間獻王が毛萇と輯めしものなり。この説は劉向に本くものなれば、劉向が武帝の世を距ること未だ甚だ遠からず、又中秘の書を校せしことより考へて、其の説の必ずや確據あるべく、決して鑿空杜撰にあらざるを知る。依りて其の最も信憑すべき説たるを知るなり。次に第二說につきて考ふるに、梁の沈約が公孫尼子に取ると斷せしは何に據りしか。漢志には儒家に公孫尼子二十八篇、雜家に一篇あり。隋書經籍志には、二十八篇の公孫尼子は存せざるも、雜家の一篇は儒家中に存せり。されば沈約は二十八篇の公孫尼子は恐らくは之を觀ざらんも、一篇の公孫尼子は之を觀しものなることは殆んど疑ふべからず。是を以て之を觀れば、沈約はその篇中に樂記と相合するものあるを認めて、此くの如く斷せしものなるべし。特に論衡中の記事は公孫尼子の主樂論者なりしことを旁證するに足る。されば公孫尼子は既に上にも述べたる如く、漢志の所謂諸子の樂事を言ふものゝ一人にして、樂記の其の説に取るところあるは亦疑ふべからざるに似たり。次に第三說につきて考ふるに子貢子夏の作といふ説は、樂記篇中魏文侯と子夏との問答、又師乙と子貢との問答あるより、單に臆測せしに

過ぎず。されど、子夏と魏文侯との問答は、文侯二十五年の事なれば、是時子夏年一百八歳なり。子貢尙存せんやと聞若璩の辨せるによりても、この説の毫も信據するに足らざるを見るなり。次に最後の第四説につきて考ふるに、道家に出づとの説は、天理人欲の一條が字句に多少の異同はあるも、今傳はるところの文子に、老子の語として出で居るよりしか云へるなり。然るに、これは後にも論する如く、今傳はるところの文子は全然真なるものとは信じ難ければ、この説亦容易に信すべからず。

右の如く樂記の作者より考ふるときは、其の最も信すべきは、天理人欲の思想は孔門諸弟子の間に發展せしものなるに似たり。

然るに今觀察の方面を轉じて、樂記の天理人欲の條の本文の載せらるゝ諸書に就きて考ふるに、天理人欲の條は樂記以外、呂氏春秋淮南子文子及び史記樂書に見ゆ。史記樂書は褚少孫が樂記を取りて、補入せしものなれば、固より同一なり。今は數字を異にし、十一篇の順序相異なれり。今對比に便せんため、樂記呂氏春秋淮南子文子の原文を左に掲げん。

### 樂記

人生而靜。天之性也。感於物而動。性之欲也。物至知知。然後好惡形焉。好惡無節於內。知誘於外。不能反躬。天理滅矣。夫物之感人無窮。而人之好惡無節。則是物至而人化。物也。人化。物也者。滅天理而窮人欲者也。云々(樂本第一)

### 呂氏春秋

生也者。其身固靜。感而後知。或使之也。遂而不返。制乎嗜欲。制乎嗜欲。無窮。則必失其天矣。且夫嗜欲無窮。則必有貪鄙悖亂之心。淫佚姦詐之事。故彊者却弱。衆者暴寡。勇者凌怯。壯者傲幼。從此生矣。(仲夏紀修樂)

### 淮南子

眞面目を存するものなるべし。

人生而靜。天之性也。感而後動。性之害也。物至而神應。知之動也。知與物接。而好憎生焉。好憎成レ形。而知誘ニ於外。不能レ反レ己。而天理滅矣。故達ニ於道者。不以レ人易レ天。外與物化。内不レ失其情。云云（原道訓）

文 子

老子曰。上略 人生而靜。天之性也。感物而動。性之欲也。物至而應。智之動也。智與物接。而好憎生焉。好憎成レ形。而智出ニ于外。不能レ反レ己。而天理滅矣。是故聖人不以レ人易レ天。外與物化。而内不レ失情。云々（道原）

今淮南子を見るに、樂記と稍々字句の異なるところあり。淮南子と文子とを對比するに、殆んど全く相同くして、其の何れかが他より出でしものなるは、一見して分明なり。然るに淮南子は漢初の作に係ることは疑を容れず。文子は唐柳宗元已に其の辯文子に於て、其の駁書なるを辯じて、其渾而類者少。竊取他書以合之者多。凡孟子輩數家皆見三剽竊。といへり。されば、文子の此の一節は淮南子に出でしものなるべし。次に呂氏春秋を見るに、樂記淮南子と字句に於て大に相異なるものあり。樂記と淮南子とは、大體に於て相同きも、呂氏春秋に於ては大に相異なるものあり。

呂氏春秋は、呂不韋が當時の學者を集めて、各々其の聞くところを著はさしめたるものにして、周末諸子の學を網羅せるものともいふべく、しかも一人の手に出でざるが故に、一家の學に統一せらるゝところなし。清汪中も其の呂氏春秋序（代畢尙書作）に勸學誣徒尊師善學四篇。皆教學之方與三學記表裏。云々といへり。淮南子も其の百家を網羅するの點に於ては、呂氏春秋と相同きも、呂氏春秋が各家の眞面目を其の儘ま存せるに反して、淮南王劉安の手裁を経て、道家の學に統一せらるゝところ大に相異なるところあり。今呂氏春秋に大樂、侈樂、適音、古樂、音律、音初、制樂等の諸篇あり。此等は恐らくは諸子の樂事を言ひしものゝ

因つて考ふるに、樂記淮南子等に見ゆる天理人欲の一節は、其の原形は呂氏春秋修樂篇のそれに非るか。而してこれ漢志に所謂諸子樂事を言ふものゝ一なるべし。樂記は漢初の儒者が改竄を加へて、今日の形を成しゝものに非るか。今呂氏春秋に在る此節を觀るに、天理人欲の語なし。只だ天と嗜欲との語あるのみ。而して天の字は高誘註には身と訓せり。淮南子原道訓註も亦同じ。されば、天理人欲の對説は先秦に於ては未だ之を見ず。理欲の對説は道家の説に多きも、老莊列三子に於ては未だ之を見ざるなり。老子は欲と天とを説けども、未だ理を説かず。其の説くところの天は、天理の義に非ず。列子は諸處に理の字を用ふるも、未だ理欲を對説せず。莊子は養生主天運兩篇に於て天理の語あるも、前者は腠理を指し、後者は人事に對する天理なり。而して未だ理欲を對説するものを見ず。又莊子に於ては、天と人との對説諸處に見ゆるも、これらは皆無爲自然と有爲有心との對説にして、天理人欲の對説に非ず。此等の事實は、天理人欲の對説が比較的後世に在ることを證するものなり。

然るに荀子解蔽篇に故道經曰。人心之危。道心之微。危微之幾。惟明君子而後能知之。とあり。この人心道心は天理人欲と全く語を異にするも、其の概念に至りては相一致するものなり。道經の何物なるかは、今明かならざるも、解蔽篇が道家の貴ぶところの虛一と靜とを説ける邊より察するに、道經亦道家の經に非るか。果して然らば、天理人欲の對説は先秦には見えざるも、理欲對説の思想は已に道家の間に發達せしものと考へ得べし。

然らば天理人欲の對説は果して何人の手に依りて、樂記の原形より改作せられしものなるか。これ輕々に斷じ得べきことには非るも、姑く臆測を逞うせんに、毛萇の師毛亨は、荀卿より其の學を傳へたるものなれば、毛萇も亦其の學を承け傳へたるものといふべし。従つて毛萇の徒が人心道心の説より、其の樂記を輯むるに當りて、天と嗜欲との語を天理人欲に改めて、兩者を對説し、今の樂記樂本篇の形に成しゝものには非るか。若しこの臆測にして誤なからんか、理欲對説の思想の淵源は或は先秦時代に存すとすると、天理人欲

の對説は漢初に始まるものといはざるべからず。

淮南王安と河間獻王徳とは同時代なれば、淮南王が河間獻王の作りたる樂記を取りて、之を其の書中に收むといふことは信すべからずと難するものあらんも、これは樂本篇が二王の下に集りし學者の手に依りて、今日の兩書の形となりて傳はりしものと見ることを得べし。又荀子に樂論篇のあることは荀子が已に樂記を看たる證となすべきに似たり。然るに荀子の樂論篇を觀るに、今の樂記中の樂化樂言樂象樂情の一部分を採りて、其の大半を成せり。因りて考ふるに、樂記は其の樂本以下の十一篇は、むしろ漢初の儒者が荀子の樂論篇其の他諸子の樂事を言ふものを併せ采りて、之を類編して作りしものに非るか。しか考ふるときは、今の樂記は荀子以前に存せしに非ずして漢初に作られしものなること、漢志の説の如くなるべし。されど其の資料は固より先秦に在り。但だ樂本篇天理人欲の段に於けるが如く、漢初の儒者の改竄の手の加はりしもの必ずや少からざるべし。